

10月7日 年間第27主日

創 2:18～24 ヘブ 2:9～11 マコ 10:2～16

1. マコ

共観福音書に描かれているイエスは、間もなく十字架に掛けられて死に、三日の後に復活して「父の栄光に輝いて聖なる天使たちと共に来る」(8:38)と、弟子たちに語っておられた「人の子」なるメシアです。当時弟子たちは、イエスの語る事が理解出来なかったが、「怖くて尋ねられなかった」(9:32)のでした。

原始教会は、この復活して「天と地の一切の権能を授かり」(マタ 28:18)、「天に上げられ、神の右の座に着かれた」(マコ 16:19)イエスが、「生きている者と死んだ者との審判者として」(使 10:42)、栄光のうちに再び来られる救いの完成の日を待望するようにと宣教しました(フィリ 3:20、Iテサ 1:10、IIテモ 4:1-2)。ですから、私たちは現在伝えられている福音書の物語りを、「あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです」(Iコリ 11:26)という、私たちの“ともにささげるミサ”を背景にして理解しなければなりません。

v.2 「…… 律法にかなっているでしょうか。」

世間では、“法律的に違反と認められなければ、無罪である”ということになっているのと同じように、教会でも多くの人々が“カトリックの教えに違反しないこと”が大切だと考えています。しかし事実は、現代だけでなく昔もいつも、それに反して世の中は罪のただ中であつたと言うのが本当です。この離縁の問題についても、マタ 19:10 には当時の人々の率直な反応が挿入されています。むしろこのテキストは、なぜ神の子であるイエスが受肉して「わたしたちの間に宿られ」(ヨハ 1:14)、「わたしたちの罪のために死に渡され」(ロマ 4:25)なければならなかったか、なぜ“二度目には…… 御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてくださる”(ヘブ 9:28)のかを説明する、原始教会の宣教の一部でありました。

このイエスの教えを盾にして、過去のキリスト教は世間を批判し、離婚や再婚の当事者たちを断罪して来ました。しかし最近の信者は身内にそのような離婚者や再婚者を抱えるのが多くなって、次第に沈黙してしまう傾向が見られます。私たちは、キリストによる罪の赦しを必要としているのです。

vv.13-14 は、もしかすると、結婚には子供の誕生が続くという日常的な結びつきで、ここに取り上げられたのかも知れません。ほとんどのカトリック教会で、主日のミサの最中に子供たちが多かれ少なかれ騒いでいます。「神の国はこのような者たちのものである」ということで、皆さん我慢していますが、本当は騒々しくて大いにミサが妨げられているのです。

弟子たちもそう思いました。「幼子や乳飲み子の口に、あなたは賛美を歌わせた」(マタ 21:16、詩 8:3)というのは、再臨の主によって実現する来るべき神の国でのことであって、教会はその日の到来を今は待望しているのです。ですから地上の教会も、イエスと共に、子供たちを祝福するのです。決して騒々しい中でのミサの実態を、これが理想の姿だと肯定しているわけではありません。

2. ヘブ

v.9 「ただ、“天使たちよりも、わずかの間、低い者とされた” イエスが、死の苦しみのゆえに、“栄光と栄誉の冠を授けられた” のを見えています。神の恵みによって、すべての人のために死んでくださったのです。」

原始教会は使徒たちと共に、“わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられた” イエスを宣教しました。使徒パウロはコリントの教会に宛てて、「わたしはあなたがたの間で、イエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外、何も知るまいと決めていた」(1コリ2:2)と書いています。

聖書に親しむ人は、そこで語られている宣教が、神の国すなわち来るべき世界(2:5)に関する福音の宣教であることを理解するようになります。自分で聖書を読んで、使徒たちが伝えた福音に真剣に耳を傾ける人は、「わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます」(ロマ6:8)という希望に、アーメンと唱和するようになるのです。

しかし、昔も今も、教会では自分でほんとうに聖書に親しむ信者は、いつも非常に少数でありました。ほんの2〜3ページ読んだだけで、いっぴしの批評をしているような、自称知識人が多いのです。

3. 創

v.24 「こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。」

神が創造された本来の人間のあるべき姿と、私たちが生きている罪の現実との対比を読み取らないと、聖書はただの断罪の書になってしまいます。地上にあって私たちは、“初めからそうだったのではない”(マタ19:8)罪と死の世界に生きているのです。

私たちキリスト者は、“わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によって”(ガラ2:20)生きているのです。ですから使徒パウロと共に、私たちも宣言しましょうではありませんか。「死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか。わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。」(ロマ7:24-25) アーメン、ハレルヤ。

10月14日 年間第28主日

知 7:7～11 ヘブ 4:12～13 マコ 10:17～30

1. マコ

v.21 「イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。“あなたに欠けているものが一つある。”」

この人は、旧約聖書とユダヤ教の教えを恐らくかなりよく知っており、“そういうことはみな、子供の時から守ってきた”(v.20)、とても真面目なユダヤ教徒でありました。今日、カトリック信者の多くも、これと同じような答えをすることが出来るに違いありません。“私は、子供の時からカトリックの教えを守ってきました”と。しかし、それらを教えや戒律として学び、これを遵守するように努力するというのとは、かなり次元の違う理解を、イエスは“信仰”という観点から説明しようとされました。“救われるとは(永遠の命を受け継ぐとは)”、“人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。”(v.27)

「信仰年」が始まりました。この一年を通してカトリック信者が“信仰の内容を系統的に知る”ことを、教皇ベネディクト XVIは“自発教令”の中で求めておられます。カテケーシス(カテキズム)とは、教会の信仰を問答形式で教えるもので、古代教会以来幾多の変遷を経て用いられ続けて来ました。それは洗礼志願者の教育のためだけではなく、広く信者と教導職の信仰を育てるためのものであって、私たちは現在、第二バチカン公会議の最も重要な成果と言われる“カトリック教会のカテキズム”を持っていて、その内容は四編から成っています。第一編は“信仰宣言”であって、主に使徒信条に沿って述べられます。第二編は“典礼”と“秘跡”を取り上げます。ベネディクト XVIは自発教令の中で、「典礼と秘跡がなければ、信仰告白は力を失います」と説明しておられます。第三編は信仰生活を、第四編では祈りを取り上げています。

私たちが“福音”と“信仰”を理解する鍵が、主の受難と復活の出来事にあることを、マルコ福音書が強調していることを読み取る必要があります(8:31 以下、9:30 以下、10:32 以下)。“教え”は学んでも、“信仰”には無頓着である(ヘブ 2:3)カトリック信者が、実際には多いからです。

カトリックでもプロテスタントでも、一般的な傾向として、“福音と信仰”のことは教導職に委せて、信者はいわば理解抜きで“教え”を守る努力をしていけばよいという考えが、教会の大勢であるように見えます。しかも実際には、司祭たちも牧師たちも、そのような教会の信者の中から産み出されたのです。ですから、彼らがミサや礼拝の説教で“教え”は語っても、“福音と信仰”を主題にすることはほとんどないという現実を、私たちは直視する必要があります。当然といえば当然なのですが、現代の教導職と一般信者は、能力の点でも知識の点でも同じレベルのところにおいて……、「主が与えてくださったこの霊的恵みの時に、信仰という貴い賜物をわたしとともに思い起こしてください」という教皇の呼びかけの下に立っているのです。「信仰年」を、私たち一人一人が「変わることはない信仰をもっとよく知り、将来の世代に伝える必要を、強く感じるため」(自発教令)に、悔い改めて立ち戻る(黙 2:4-5)機会としなければなりません。

2. ヘブ

「神の言葉」(v.12)とは、「信仰の言葉」(ロマ10:8)であって、「イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられた」(ロマ4:25)、私たちは「洗礼によって、キリストと共に葬られ、また、キリストを死者の中から復活させた神の力を信じて、キリストと共に復活させられた」(コロ2:12)という、キリストの福音に他なりません。

けれども、“その言葉が、それを聞いた人々と、信仰によって結びつかなかった”(4:2)なら、それは単なる“一つの教え”にしか過ぎなくなってしまいます。実際のところ今日の多くの人々が、キリスト教を“神のことは”や“信仰”としてではなくて、“守るべき一つの教え”として理解しています。そうです。「あなたに欠けているものが一つある」と、主は現代の教会に向かって語っておられるのです。

「けれども、キリストは、既に……、御自身の血によって、ただ一度(天の)聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられたのです。」(9:12) この“信仰”に固く立って、私たちは“カトリック教会のカテキズム”と“聖書”を学んで行きましょう。「この神に対して、わたしたちは(終わりの日に)自分のことを申し述べねばなりません。」(v.13)

3. 知

v.7 「わたしは祈った。すると悟りが与えられ、願うと、知恵の霊が訪れた。」

すべての信者が同じ賜物を与えられているわけではありません。教会では「一人一人に、キリストの賜物のはかりに従って、恵みが与えられています。」(エフェ4:7) そして「一人一人に“霊”の働きが現れるのは、(教会)全体の益となるためです。」(1コリ12:7) しかし、“福音と信仰”に関することは教導職に委せて、信者はいわば理解抜きで“教え”を守る努力をしていけばよいなどと、決して考えるてはならないのです。どうか「信仰年」が、教会のすべての信者にとっての“霊的恵みの時”となりますように。

アーメン、ハレルヤ。

10月21日 年間第29主日

イザ 53:10~11 ヘブ 4:14~16 マコ 10:35~45

1. ヘブ

v.14 「わたしたちの公に言い表している信仰をしっかりと保とうではありませんか。」

信仰年に入り、この機会にカトリック浜松教会の主日のミサの信仰宣言で、ニケア・コンスタンチノーブル信条が唱和されるようになったことを、大いに喜び、神に感謝をささげたいと思います。キリストの人格についての教理と三位一体の教理に関して、最終的なカトリックの立場を表明するに至ったニケア公会議(325年)、コンスタンチノーブル公会議(381年)、エフェソ公会議(431年)、カルケドン公会議(451年)の成果であり、いわばカトリック信仰の骨格であるこの信条を、現代の私たちの教会は必要としているからです。

現代の教会が“ゆだねられた信仰の遺産”(カトリック教会のカテキズム)、すなわち「公に言い表している信仰」を保つことは、私たち一人一人がミサで「大胆に恵みの座に近づく」(v.16)ために必須の事柄であり、“神の民の信仰に活力を与えるはずのものです。”(使徒憲章) 「どうか、わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の源である御父が、あなたがたに知恵と啓示との霊を与え、神を深く知ることができるようにし、心の目を開いてくださるように。」(エフェ1:17-18)

2. マコ

v.38 「イエスは言われた。“あなたがたは、自分が何を願っているのか、分かっていない。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか。”」

イエスがここで言われたのは、明らかに罪に対する“神の怒りの杯”のことでありました。ですから私たちは、「飲む(πίνω)」が現在形で、恐らくイエスの公生涯が既に“飲んでいる”苦しみの歩みであったことを、読み取らなければなりません(ルカ12:50参照)。“苦しみを受け”という信条の句を解説して、ハイデルベルク信仰問答37は次のように述べています。“主が、この世のご生涯において、ことにその終わりにおいて、絶えず全人類の罪に対する神の怒りを、身と魂とをもって受けて、その御苦しみを唯一の宥めの供え物として、われわれの魂を永遠の刑罰より救い、われわれのために神の恵みと義と永遠の命とを、得てくださるに至ったことであります。”(カトリック教会のカテキズム608参照)

v.45 「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」

信条が御子イエス・キリストを“父と一体”と宣言したのは、キリストが神の本質そのものに属するということを表明するためでありました。私たちの罪を償ういけにえとして遣わされた御子は、“神よりの神、光よりの光、まことの神よりのまことの神”であったというこの宣言を、現代のキリスト者は再認識しなければなりません。確かに私たち一人一人は、キリストの死に与り(ロマ6:3-4)、キリストに倣う(フィリ2:5)ことに

なるでありましょうが(v.39)、御自身を私たちの罪を償ういけにえとして神に献げられた方はただ一人、「信仰の創始者また完成者であるイエス」(ヘブ 12:2)だけなのです。「見よ、この人だ。」(ヨハ 19:5 / 口語訳) 大切なのは、神です(1コリ3:7)!

3. イザ

v.10 「病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ、彼は自らを償いの献げ物とした。」

“罪を取り除くために御子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断された”(ロマ 8:3)のは、神でありました。“神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。”(1ヨハ 4:10) そして御子は自ら進んで従順に(フィリ 2:8)、命を捨てて再び復活させられました(ヨハ 10:17-18、使 2:32、ロマ 4:25)。

これが、「ポンティオ・ピラトのもとで、わたしたちのために十字架につけられ、苦しみを受け」という信条の言葉の意味です。教会の宣教のすべてはこの事実に関わり、私たちキリスト者の信仰も全面的にこの救贖の御業に基づいています。主日ごとの司祭の説教の主題が多岐に亘っていても、カトリック教会ではいつも“ことばの典礼”は、会衆一同による信条の宣言によって締めくくられることを感謝しましょう。このようにして共同体の集まりの中心は、ここで朗読台から主の食卓(祭壇)へと移って行きます。

アーメン、ハレルヤ。

10月28日 年間第30主日

エレ 31:7～9 ヘブ 5:1～6 マコ 10:46～52

1. マコ

v.52 「盲人は、すぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った。」

見えるようになったバルティマイが、エルサレムへと向かわれるイエスに同行したというのは事実であろうと思われませんが、その伝承の過程で特に「イエスに従った」という表現が、説教の主題として大切にされたと推測されます。マタイでもルカでも、この表現が保持されているからです。

「二人はすぐに網を捨てて従った。」(1:18) 「わたしに従いなさい。……彼は立ち上がってイエスに従った。」(2:14) 「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」(8:34) 説教を聞く会衆は、これらの箇所との関連を直ちに思い起こしたに違いありません。

さらに「ティマイの子で、バルティマイという盲人の乞食」という表現は、15:21にある「アレクサンドロとルフォスとの父でシモンというキレネ人」の場合と同様に、これらの人物が初代教会の人々の間でよく知られていたということを示唆しています。明らかに彼らは、イエス・キリストの福音を告げ知らせる奉仕者でありました。使徒たちと共に福音に仕えている仲間たちが、信者の中から多く輩出していた当時の状況が、新約聖書のいくつかの箇所から読み取れるのです(使 8:4, 18:26、コロ 1:7 他)。

私たちが体験して来た日本の教会の実状は、このような初代教会の姿とは似て非なるものでありました。子供たちのためのカテケシスで指導する奉仕者は、福音についても聖書に関してもほとんど全く素人であって、それで十分間に合うのだという安易な考え方がまかり通っています。しかもその上に、成人の洗礼志願者のための準備教育においても、―― 多くの場合司祭や牧師の無能によって ――、これに似た低レベルの指導でお茶を濁すというのが普通でありました。“ミサにおける説教が司祭または助祭に保留されている”ということをお口にしながら、信者が実質的には“イエスに従う”ための努力を放棄する傾向があったことを見逃してはなりません。これはカトリックでもプロテスタントでも共通して言えることです。

v.49 「人々は盲人を呼んで言った。“安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ。”」

私たちが招き、その救いに与らせてくださった方は、「肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められた」(ロマ 1:4)イエス・キリストであることを、初代教会で宣教する者になったバルティマイが、かつてそのようにして“イエスに従った”というのがこのテキストの主題なのです。「ダビデの子イエスよ、……」

2. ヘブ

v.5 「同じようにキリストも、大祭司となる栄誉を御自分で得たのではなく、……」

私たちキリスト者が、“教会を信じ、罪の赦しをもたらす唯一の洗礼を認め”と信仰宣言するのは、

福音を通して父なる神の愛を信じたからなのです。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハ3:16) 「神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。」(Iヨハ4:10)

キリストは、私たちが思いやることが出来る「忠実な大祭司となって」(2:17)、「十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。」(Iペト2:24) そして、「御自分に忠実であるすべての人々に対して、永遠の救いの源となり、神からメルキゼデクと同じような大祭司と呼ばれたのです。」(5:9-10) この福音を、教会は宣べ伝えて来たのであり、私たちは信じて来たのです。

「従って、あなたがたの信仰と希望とは神にかかっているのです。」(Iペト1:21) 「わたしたちは、霊の導きに従って生きているなら、霊の導きに従ってまた前進しましょう。」(ガラ5:25)

3. エレ

v.8 「見よ、わたしは彼ら(主の民)を北の国から連れ戻し、地の果てから呼び集める。その中には目の見えない人も…… 共にいる。」

南王国ユダの滅亡とエルサレムの陥落(BC.586)という悲惨の直後に、主からエレミヤに言葉が臨みました。(30:1) 「遠くから、主はわたしに現れた。わたしは、とこしえの愛をもってあなた(主の民)を愛し、変わることなく慈しみを注ぐ。」(31:3)

歴史の教会が、この預言の実現であることの証言を、今朝の朗読配分はその福音書のテキストに見ているのです。「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ。」(マコ10:49) 私たち一同は、「上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た」(マコ10:50)バルティマイのように、悔い改めてイエスに従う者になろうではありませんか。

“信仰年”がすべての信徒にとって、“カトリック教会のカテキズム”と“聖書”の学びを通して“信仰の道を再発見する”恵みの年となりますように。 アーメン、ハレルヤ。